

領域「音楽リズム」 その音楽的指導における評価の問題

On the Domain of "Rhythm" — Problems of Evaluation in the Teaching of Music-Rhythm —

武田道子

Michiko TAKEDA

(昭和53年10月11日受理)

はじめに

領域「音楽リズム」における音楽的指導の評価の問題を論ずる時、単なる理解面や技能の習熟の度を目指すものではない幼児の音楽指導にあって、果して一般的に言われているような形で客観的で、しかも明解にわり切れる評価というものをどのように考えたらよいのであろうか。

すなわち、幼児の段階で、評価の観点をどのようにすえ、又、その方法を如何にくふうしたらよいか……このテーマは、まことに大きな課題である。

さて、幼児の音楽指導に限らず、広く音楽教育における評価のむずかしさは、今日なお、満足のいく結果を見ていない事実でもわかるように、そのよってきたるところは、音楽という教科の特質が、情操と技能（ないし理解）の二面性をもっているという点に由来している。

そして、さらに、普通教育における音楽教育の目的は、当然のこと技能の面というよりは、むしろ、情操とか、創造性といった確証しにくい形而上的な概念の内容に大きなウエイトをかけているということである。

私は、この感覚優先の指導と評価に通ずる原理を、強く主張するものであるが、とりわけ身体的に未発達の状態にある幼児の段階において、その感を深くせざるを得ない。

なお、幼児のささやかな表現力は、あくまでも、そのかわいらしい心の発現につながってこそ、教育として本質的なものになり得るということで位置づけたいと思う。つまり、技能の側面は、その意味で評価の対象として生きるということになる。

以上、この音楽のもっている特性を素直に認め、しかも幼児の発達段階を正しくふまえた上で、幼児の音楽指導における評価をできる限り客観的、具体的にし、しかもふんわりと音楽に包まれた幸せな子どもを育てる為の方策を確立することが、この論文の主旨である。

I 幼児の音楽教育の目的

ここでは、まず芸術教育それ自体の価値・役割を明確にし、更に、音楽教育の果すべき使命を確認し、究極的には、幼児の音楽教育の目的の位置づけをしたい。

芸術教育の価値および役割について、供田武嘉津は、その著書「音楽教育学」の中で、ハー

パート・リードなど、多数の先人の哲学者、音楽心理学者などの芸術教育についての考え方を挙げながら「～芸術教育の価値は何かと言えば、それはまず第一に、究極的な価値としての“愛の心情、の感得であり、第二に、随伴的ないしは結果的な価値としての“情操、や“創造的心情、の育成、などというような人間形成の面に寄与しうる点にあることは明確である～」¹⁾とまとめ、さらに「～普通教育における音楽教育とは、音楽の教育的価値の感得を意図し、さらに音楽の芸術的価値をも希求する目的のもとに、音楽的技能の習熟を図り、音楽愛好の心情を育成しようと試みる教育作用である～目的観を煎じつめて言えば“音楽を好きにすること、のひと言につきるともいえる～」²⁾と述べている。要約すると、普通教育における音楽教育とは、“愛の心情、の感得を意図し、さらに情操、創造性、自己表現といった価値を希求する目的のもとに、音楽的技能の習熟を図り、音楽愛好の心情を育成しようと試みる教育作用である”とすることができよう。芸術教育……音楽教育を意味した論説であるが、まさに、幼児の音楽指導にあつては、この“音楽を好きにする、の一言に究極の目的があると私は思う。“楽しく、・“喜んで、の意欲・興味に支えられた態度面の育成こそ、将来、音楽学習を進める上の大きな推進力となり、好ましい音楽愛好の心情も培われていくものと確信したい。

さて、“喜んで、・“楽しく、しかも、将来自己実現の創造の目的達成をめざして、どのような目標を立てたらよいであろう。つぎの礼記の「それ楽は楽しむなり」の中の一説に、その鍵があらうように思う。

「～それ楽はたのしむなり。楽しむは人情であつて、だれもこれからはまぬがれることはできない。人は楽しくなれば必ずそれは声音に発し、それを身体の動静にあらわす。これが人の道である～」³⁾と述べ、音楽の効用を挙げている。

“喜んで、・“楽しく、しかも自己実現の創造の目的達成への目安は、幼児の声により、又顔の表情により、そして身体全体で表現され得たものを通してはかる事ができるといえそうである。

音楽にふんわりと幸わせに包まれ、音楽の好きな子どもに育てることが、幼児の音楽指導の目的であることを確認して、その具体的目標を吟味していきたい。

II 指導目標と評価の観点となる活動内容

幼児の音楽的行動、これを大きく四つに分けて考えることができる。つまり、歌う活動、ひく活動、作る活動、聞く活動がそれである。実際保育の場では、これにさらに、動く活動がプラスされ、それぞれが統合的に関わり合った姿で指導がなされることは当然である。ここでは舞踏的表現を除いて、特に音楽的行動面における指導目標を挙げ、更に、目標達成の為の評価の観点を具体的な幼児の活動内容に結んだ形でとらえられるよう四つの活動のジャンル毎に分析していきたい。

☆ 歌う活動の目標と評価の観点

“歌遊び、の目標は次のように考える。

- ① 楽しく歌わせる。
- ② 歌唱の基礎的技能の芽を育てる。
- ③ 愛唱歌を身につけさせる。

上記①、②、③の目標達成の評価資料を得るための、具体的な行動内容は次のようである。

- ① 楽しく歌わせる。
 - ア、教師の範唱がよく聞ける。

- イ、歌がはやく覚えられる。
- ウ、進んで身体反応をしながら歌える。
- エ、みんなと一緒に声をそろえて、喜んで歌える。
- オ、2～3人の友だちと、みんなの前で歌える。
- カ、1人でもみんなの前で歌える。
- キ、知っている歌を聞くと、喜んで歌い出す。
- ク、歌詞の内容を理解して、表情たっぷりに歌える。

② 歌唱の基礎的技能の芽を育てる。

- ア、りきんだり、どなったりしないで、らかな声で歌える。
- イ、小さい声や、ハミングで歌える。
- ウ、らかな姿勢で、のびのびと歌える。
- エ、口をよく開けて、はっきりとした言葉で歌える。
- オ、フレーズや歌詞の内容を意識した息つきができる。
- カ、無理のない音域の曲が、正しい音程で歌える。
- キ、曲の速さやリズムに合わせた歌い方ができる。
- ク、ピアノやオルガンの伴奏に合わせて歌える。

③ 愛唱歌を身につけさせる。

- ア、たくさんのがそらで歌える。
- イ、遊んでいる時、自由な時間などによくひとりで歌って楽しめる。

〔備考〕

①の観点は、態度・意欲面の評価が中心であり、特に、幼児の表情と積極的に音楽に向かおうとする行動の観点に力点をおくことが、評価の鍵である。

☆ ひく活動の目標と評価の観点

「楽器遊び」の目標は、大きく次のように考える。

- ① 楽しくひかせる。
- ② 基礎的な演奏技能の芽を育てる。
- ③ 分担奏や合奏を楽しませる。
- ④ 楽器を大切に扱う為の良い習慣を身につけさせる。

各①、②、③、④の目標達成の為の具体的な行動内容は、次のようである。

① 楽しくひかせる。

- ア、よろこんで音の出るものを振ったり、叩いたりすることができる。
- イ、知っている歌を歌いながら、自由に楽器遊びができる。
- ウ、音楽を聞きながら、楽しんで楽器遊びができる。
- エ、みんなと一緒に、仲よく楽器遊びができる。
- オ、何人かの友だちと、みんなの前で楽器遊びができる。
- カ、ひとりでも、みんなの前で楽器遊びができる。
- キ、指導者のまねを、楽しんですることができる。

② 基礎的な演奏技能の芽を育てる。

- ア、曲の速さに合わせて、リズム楽器が打てる。
- イ、「だんだん速く、・「だんだん遅く、に反応して、リズム楽器が打てる。

ウ、強部や弱部に反応して、リズム楽器が打てる。

エ、次のリズム楽器が正しくひける。

(無音程打楽器)

カスタネット タンプリン トライアングル ウッドブロック 鈴 小太鼓
大太鼓 シンバル 拍子木

(有音程打楽器)

木琴 鉄琴

オ、旋律楽器で簡単なリズム奏やさぐりびき(吹き)ができる。

(旋律楽器)

オルガン ハーモニカ 鍵盤ハーモニカ

③ 分担奏や合奏を楽しませる。

ア、2・3・4拍子の拍打ちができる。

イ、簡単な歌のリズムに合わせて、分担奏ができる。

ウ、頭打ちとあと打ちを組み合わせた合奏ができる。

エ、絵譜を見ながら、手拍子をしたり、リズム楽器が打てる。

オ、曲の感じに合った強弱をくふうしながら、分担奏や合奏ができる。

カ、曲に合った速度にのって、分担奏や合奏ができる。

キ、友だちと、楽しく協力して合奏ができる。

ク、自分の番がくるまで、音を出さずに待つことができる。

④ 楽器を大切に扱う為の良い習慣を身につけさせる。

ア、仲よく交代して楽器が扱える。

イ、楽器が元にあった場所にきちんと片づけられる。

ウ、楽器がていねいに扱える。

[備考]

②のエ・オについて、幼児の段階で、各楽器の打ち方、ひき方の程度を次のようにおさえる。

- カスタネット……右手の指先で、軽くはずませて打てる。
- タンプリン……鼓面を右の手の平で、打てる(トレモロ奏も含める。)
- トライアングル……左手で持ち、トライアングルの底辺または斜辺を右手に持った打ち棒で軽く打てる。(トレモロ奏も含める。)
- ウッドブロック……左に低音、右が高音になるよう持ち(又は置き)、右手に持った打ち棒で、リズムカルに打てる。
- 鈴……左手で鈴を持ち、右手こぶしで左手首が打てる。
- 小太鼓……右手の一本ばちで、トントンと軽くはずませて打てる。
- 大太鼓……右手にばち、左手は太鼓のわく金を軽く持ち、曲の強さを生かして打てる。
- シンバル……左手に一枚のシンバルを持ち(又は固定して)、右手ばち(曲想によりばちの種類を変化)で、シンバルのふちが打てる。(年齢や楽器の重量を考慮し、二枚合わせの打ち方を含めてもよい。)
- 拍子木……軽く拍子木を持ち、良い音色が得られるよう交叉した形に打てる。
- 木琴……右手の一本ばちで、軽くはずんで打てる。(グリサンド奏を含めたリズム奏を中心に、簡単な旋律奏を含めてもよい。)

- 鉄琴……木琴に同じ。
- オルガン……簡単なリズム奏やさぐりびきができる。(技能面より、楽しんで自由にひくことを中心に考える。)
- ハーモニカ……オルガンに同じ。
- 鍵盤ハーモニカ……オルガンに同じ。

☆ 作る活動の目標と評価の観点

“創作遊び、の目標は、大きく次のように考える。

- ① 楽しく、即興的な自己表現ができるようにさせる。
- ② 楽器を感じたまま、自由にひけるようにさせる。
- ③ 分担奏や合奏をくふうさせる。

以上の①、②、③の目標達成の為に、具体的な音楽行動内容は次のようである。

- ① 楽しく、即興的な自己表現ができるようにさせる。
 - ア、表情たっぷり、のびのびと鳴き声や物音のまねっこあそびができる。
 - イ、陽旋法のふしで、名前呼びや言葉あつめ遊びが、楽しくできる。
 - ウ、友だちのまねをしないで、自分から進んで、身体表現がくふうできる。
 - エ、遊んでいる時でも、自由なメロディを歌い出すことができる。
 - オ、簡単な言葉に、即興的にメロディをつけることができる。
 - カ、教師対幼児で、簡単な歌問答ができる。
 - キ、知っている旋律に合った言葉をくふうして、つけることができる。
 - ク、友だちと一緒に、考えたことくふうした事を進んで発表できる。
 - ケ、ひとりでも、考えたことくふうした事を、みんなの前で発表できる。
- ② 楽器を感じたまま、自由にひけるようにさせる。
 - ア、歌いながら、自由にくふうして、楽器を打つことができる。
 - イ、音楽を聞いて、それに合ったリズムをくふうして、楽器を打つことができる。
 - ウ、拍の流れののったリズム打ちをくふうすることができる。
 - エ、打楽器で、動物や乗物などの擬声・音や動きを、即興的にくふうして、打つことができる。
- ③ 分担奏や合奏をくふうさせる。
 - ア、歌いながら、ふしの形式を生かした分担奏がくふうできる。
 - イ、歌いながら、ふしの形式を生かした簡単な合奏がくふうできる。

〔備考〕

①は、フレーズを生かして、ふしの形式を生かしてのくふうを重視する視点で評価する。

☆ 聞く活動の目標と評価の観点

“鑑賞遊び、の目標は、次のように考える。

- △ みんなと一緒に喜んで、音楽を聞くことができるようにさせる。
- △ いろいろなすぐれた音楽に触れさせ、音や曲の感じの違いを感じとらせる。
- △ 日常生活においても、音楽を聞くことに興味を持たせ、音楽愛好の態度を養う。
 - △、△、△の目標達成の為に、具体的には、音楽行動内容を次のように考える。
- △ みんなと一緒に喜んで、音楽を聞くことができるようにさせる。
 - ア、音楽が聞えると、喜んでおどれる。

イ、レコードや友だちの演奏を、楽しんで聞ける。

ウ、音楽に合わせて、足ぶみや行進をしながら、音楽が聞ける。

エ、模擬演奏をしながら、音楽が聞ける。

オ、知っているメロディが出てくると、口ずさみながら聞ける。

カ、紙芝居やペープサートなどを見ながら、想像豊かに音楽が聞ける。

キ、音楽が静かに聞ける。

△ いろいろなすぐれた音楽に触れさせ、音色や曲の感じの違いを感じとらせる。

ア、音楽を聞いて、簡単な言葉で曲想がつかめる。

イ、ラッパやバイオリンの仲間など、簡単な楽器の音色がわかり、模擬演奏で反応できる。

△ 日常生活においても、音楽を聞くことに興味を持たせ、音楽愛好の態度を養う。

ア、好きな曲を、何回も聞ける。

〔備考〕

△のアについては、発達に即して、たとえば、次のように大まかな曲想をとらえさせる程度でよい。

- 元気な音楽 ● 静かな音楽 ● こわい音楽 ● 楽しい音楽 ● 悲しい音楽 ● 淋しい音楽
- 踊りたくなるような音楽 ● 歌っているような音楽 ● おもしろい音楽 ● きれいな音楽
- おかしい音楽 ● かわいらしい音楽 など

△のイについては、打楽器のいろいろ、笛の仲間、ラッパの仲間、バイオリン及びその仲間ピアノなどの音色が聞き分けられる程度でおさえる。

以上歌う、ひく、作る、聞くの四つの活動のジャンル毎に、目標を挙げ、その為の評価の観点をすえてきた。“楽しく”、“喜んで”をベースにし、しかも音楽の中にふんわり包まれて、音楽の好きな子どもを育てるという目的を再度確認して、次に論を進めたい。

III 評価場面と方法

音楽リズムにおける音楽的指導の評価は、四つの活動すべてに関わる観察法、特に歌う・ひく活動に関わる演奏法、即興的な創作遊びに関わる作品法などの統合された姿で行なわれなければならないであろう。そして、その評価場面は、例えば音楽的な自由遊びの中、あるいは、教師が特別に設定し準備する場面、さらに、個別に呼びよせて面接するような場面などに類別して考えることができる。

音楽が時間的芸術であるという特質と幼児の音楽的行動が画一的に測り切れないことなどから以下のようにまとめることは、また別の意味の警戒点を心配するのではあるが、落ちなく指導するための支えとして整理しておきたい。

観察法

学習

①…ア、イ、ウ、エ、オ、カ、キ、ク

②…ウ

①…ア、イ、ウ、エ、オ、カ、キ

③…キ、ク

④…ア、イ、ウ

⑤…ア、ウ、ク、ケ

△…ア、イ、ウ、エ、オ、カ、キ

△…ア、イ

△…ア

行事

①…エ、オ、カ

③…ア

①…オ、カ

③…ク

△…イ, キ	③…ア, イ, ウ, エ, オ, カ
遊び	行事
①…ウ, キ, ク	③…オ, カ
②…ア	遊び
③…イ	②…イ, カ
①…ア, イ, ウ, キ	②…オ
④…ア, イ, ウ	作品法
④…ア, エ	学習
△…ア, エ, オ	④…イ, オ, カ, キ
△…ア	④…ア, イ, ウ, エ
演奏法	③…ア, イ
学習	遊び
②…ア, イ, エ, オ, カ, キ, ク	④…イ, オ, カ
②…ア, イ, ウ, エ, オ	

さて、「評価の実際」に論を進めたい。ここでは、実際の指導場面での評価ということで、「指導と評価の事例」のかたちで私の意を伝えることとしたい。

音楽リズムの指導

指導者 武田道子

対象児 5・6才(男18・女16 計34名)

1. 題材 「ふうせん」(小池タミ子作詞, 中田喜直作曲)
2. ねらい

- * ふんわりとんでいるふうせんの情景を思い浮かべ、やさしい曲想を生かして、どならないで歌わせる。
- * 紙ふうせんで遊ばせながら、即興的な紙ふうせんのふし遊びを楽しませる。

3. 題材設定の理由

5・6才児のクラスでは、一学期に比べ、大変に愛唱歌も増え、特に、擬声や擬音やかけ声などの入ったリズムカルな曲をととても喜んで歌うようになった。又、クラスの過半数は、のびのびとしたらかな声で歌えるようになってきたが、まだ男児のM, I, T, H, N, O, Jと女児のE, A, Yなど、ともするとどなって、りきんだ歌い方をする。

この「ふうせん」の歌詞の中にある「コツツンコ」は、かたく、どなって歌われ易い言葉であるが、ふわふわしたふうせんが、やさしくぶつかりあう様子を思いうかべさせて、上記の子ども達への歌声の指導の教材としたい。

更に、教師は、常にクラスの子ども達に対して、例えば、紙芝居や絵本のお話を読み聞かせたりする機会をとらえては、その話の一部に即興的にメロディをつけたり、日常の遊びの場での名前呼びなども、ふしづけをして呼ぶように心掛けている。子ども達は、お話の中にメロディが入ると、目を輝かして聞き入っている。このような素地のできたところで、「ふうせん」に関連づけて、紙ふうせんを作らせ、紙ふうせんで遊びながらの即興的なふし遊びを楽しませたい。

4. 指導計画

第一次(20分) 「ふうせん」の歌唱指導



第二次(25分) 紙ふうせん作り

第三次（20分） 「紙ふうせんの歌」のふし遊び

（注）第一，二，三次は，それぞれ時間をおいてなされるが，ここでは，第二次分については，その記載を省略する

5. 展開

幼児の活動		指 導 上 の 留 意 点	評 価
第 一 次	I 教師の 範唱を聞きながら 「ふうせん」の歌 を覚える。	I(ア) 歌詞の内容を生かした表情をくふうして 範唱する。 (イ) 特に，O，M，E，H，K児の目をしっかり見たり，頭の上を手をやさしくおいたりしながら範唱をする。	I(ア) ①ア・イの観点 で全体を把握する。 (イ) (ア)で，落ちてい る子に注意する。 (ウ) M，I，T，H N，O，J，A， E，Y児のどなり 声について観察す る。
	II 歌詞の 内容につ いていろ いろ話し 合う。	II(ア) “そっとふいて”，ふうせんの“こつつん こ”，“いたくないね”などの様子を自由に 身体表現しながら，話し合わせる。 (イ) I(ウ)にある幼児には，特にほめ言葉で助 言し，感覚的に理解させる。	II(ア) ①ウ，②ウ，ク ケの観点から全体 を観察評価する。 (イ) 特に，I(ウ)の幼 児の言動を観察す る。
	III 歌詞の 内容を理 解して表 情たっぷ りに歌う。	III(ア) 赤と青の二組のふうせんになって，仲よ しふうせんをくふうさせる。 (イ) どなる子は，らかな声で歌える子と組み 合わせてみる。	III(ア) ①ウ，エ，オ， ②ア，ウ，エを観 点に観察評価する。 (イ) 特に，I(ウ)の10 名に留意し，結果 を観察評価する。
	IV ピアノ の伴奏に 合わせて， 伸び伸び としたら かな声で 歌う。	IV(ア) ふうせんがふわふわとんでいるようにか らだをらかにさせて歌わせる。 (イ) じょうずに歌えるようになった子に，進 んで発表させてほめる。	IV(ア) ①エ，②ア，ウ クを観点に観察評 価する。 (イ) ①カ，③アにつ いて評価する。
第 二 次		(記 載 省 略)	

第 三 次	<p>V 「紙ふうせん、作りと遊びの楽しさについて話し合う。</p> <p>VI 先生と即興的に歌問答をして、楽しむ。</p>	<p>V(ア) 「みんなの作った紙ふうせん、お手手の上でどんな音を出して、はずんだの。」「じょうずに、つけた。」等を中心に話し合わせる。</p> <p>(イ) 特に、ポンポンポンの擬音は、リズムカルに発表させる。</p> <p>VI(ア) 紙ふうせんを、はずませているように身体表現しながら、楽しく歌いかける。</p> <p>譜1</p>  <p>(イ) 「おどってる」の所は、幼児によっては、例えば教師が次のように、メロディやリズムを変えて歌い足してやる。</p> <p>譜2</p>  <p>(ウ) 特に、リズムにのれない子は、拍打ちやふうせんつきの動きをともなわせて、即興唱をさせる。</p>	<p>V(ア) ◇アについて観察評価する。</p> <p>VI(ア) ◇オ、カ、ク、ケを観点とした観察評価ならびに、カセットテープなどに録音をしておき、作品評価とする。</p>
-------------	---	--	--

<考察>

- I(ア) ①ア、イについて……Iのような活動の場面毎に、あらかじめ5～6名、観察する対象児を決めておくとやり易い。クラス全体の顔や目を見つめる事は効果があり、根気よく毎回の積み重ねから評価する事が望ましい。
- I(ウ)・III(イ)・IV(ア) ②ア、ウ、エの歌声の指導について……特に10名の治療に留意したが発声のよい子との組み合わせや、歌詞についての話し合いが効果をあげ、この時点では、I T, H, J, A, E, Yが特に目立った変化が期待できた。M, N, Oも、感覚的に歌声の違いをとらえられているので、今後の継続的治療で、見守っていきたい。
- II(ア) ◇ウについて……まだまだ他の子のまねをしての身体表現が多い。この指導は、このような場面だけにとどまらず他の活動(例えば聞く活動)に結びつけていくように今後特に配慮したい。なお、ここでの身体表現のねらいは、「やさしさ」を表現させることにあり、その点効果はあがったようである。
- II(ア)・VI(ア) ◇ク、ケについて……II(ア)のように簡単にくふうする事の出来る内容の場合

は、ふだん発表できない子でもよい結果を得ることができた。特にその表情を見とった観察をこれからも重視したい。この項目も、内容の難易度に合わせて、あらかじめ対象児を決めておく必要がある。

- III(ア) ①ウ、オについて……II(ア)、(イ)から流れてきた活動である事と二人一組であるという事から、自然に身体表現しながら歌えたり、2人組の安心感からか、友だちの前での発表も喜んでた。これも場面毎に、5～6名の対象児をあらかじめ決めた観察評価がやり易いようである。
- III(ア)、IV(ア) ①エについて……この観点は、毎回、全体的な観察を通して問題児は見見できる。友だちの声より、自分の声が大きかったりなど、いろいろな原因が考えられるが、I(ウ)・III(ア)のようなやさしい声で歌うような指導の下に、リズム感の良い子や、教師・ピアノの近くに置かせるなどの配慮が必要である。
- IV(ア) ②クについて……この曲では、前奏をしっかりと聞きとってから歌い出せるという事と2番に入る前の最終小節の休符をピアノのリズムできちんと感じとれるかという事を観点に観察した。前奏が終わり、歌に入る直前に合図の“ハイ、”を入れてしまう習慣はなくしたいと思い、出来るだけ教師がオーバーに頭を振って導入した結果、全員揃えられるようになった。両手がふさがったら、教師の頭、身振りが指揮棒の役を果たすとよい効果があがる。
- IV(イ) ①カについて……“一人で歌いたい人?”の教師の発問に“ハイ、”“ハイ、”と元気な声と手があがる。しかし、やりたい気持はあるけれど、手をあげられない子も、最初の段階で5人程観察できた。ここでは、その子たちを2人と3人のグループに分けて発表させ、一人一人の名前を呼び、良い所を沢山とり出してほめた。友だちの拍手に、うれしそうな笑顔は満足気であった。
- IV(イ) ③アについて……全体的な学習時での観察では、やさしい曲でもあり、暗唱できたようであるが、この観点の評価は、他の場面での追跡調査が必要であると思われる。
- V(ア) ④アについて……この時期の子ども達は、すぐに動物や花その他乗物にでもなり切ってしまう。自分自身が紙ふうせんになってぼんぼんはね回る。自由にはねまわらせたあと右手又は左手で、紙ふうせんをはずませるまねをしながら、擬音遊びをする。リズムカルに打てるようにタンブリンで拍を支えてあげるようにすると効果はきめんであった。
- VI(ア) ④オ、④カについて……即興による歌問答は、今回子どもの実態を総合的につかむための意図もあって行なったわけであるが、この時期の子どもは、何のてらいもなく即興的にふし遊びができることを改めて確認した。ここでは、テープにふき込んだ作品の中からの数曲だけを紹介しておくこととする。

譜 3

ボンボン ボンボン おどてる ボンボン ボンボン おどてる

ボンボン ボンボン おどてる ボンボン ボンボン おどてる

なお、結果の処理に関して、重要な観点の別に評価の記録ができる個票を作成しておき、指導に適切な活用をくふうすれば、きわめて効果的である。

おわりに

領域「音楽リズム」の評価の問題を考える時、保育者の側に、幼児一人一人を大切に扱える優しい目と、音楽に感動できる心とが備わっている事が、第一条件である。また、子どもの外的条件（教師の人格・技術も含め、教材、気象条件、家庭、社会など）や、内的条件（問題意識、心身の状況、経験の量と質など）を適確に把握し、どういう方法をとったら、子どもを成長させることになるのか、それがどうしたら可能かという指導の見直し、問直しが常になされる必要がある。

この論文の中では、「音楽リズム」のカリキュラムに基いて指導されたものが、どれだけ身についたのか、又、どういうことが身につけばいいのかという事の評価を問題にしたわけであるが、果して、ある程度の客観性をもって評価されたものが、学習による効果であったのか、あるいは、家庭や社会の環境変化による効果だったのか、今後の問題として十分に吟味されることが必要であろう。

論を結ぶにあたり、幼児の音楽教育における評価は、子どもの興味・関心を支えにした自己実現の創造性にかかわる観点、つまり、いかにのびのびと楽しく音楽にふんわりと幸せに包まれたかという観点からの内容であり、場面であり、方法であり、解釈でなくてはならないものと確信して、筆をおきたい。

引用・参考文献

- 1) 供田武嘉津：「音楽教育学」 P33 1975.8. 音楽之友社
 - 2) 供田武嘉津：前掲書 P52
 - 3) 佐瀬 仁：「音楽心理学」 P197 1962.6. 音楽之友社
- 文部省：「幼稚園教育要領」
厚生省：「保育所保育指針」
辰見敏夫、友松諦道編：「幼児教育概説」1878.2 同文書院
玉岡 忍：「教育心理学」 1954.3. 金子書房